

『共産党宣言』における訳語の中日両言語間の交渉

——「Bourgeois」の訳語を中心に

劉 孟洋

要旨：『共産党宣言』の「Bourgeois」を翻訳していた際、中日両言語間では双方向的影響を与えていると同時に、漸次的・段階的変貌を呈している。中国に先駆けて「Bourgeois」の翻訳を行ってきた日本は訳語の創出、英華辞書からの転用を経て、カタカナの「ブルジョア」へと変わりつつある。一方、『共産党宣言』の日本語訳を媒介にした中国は、最初日本語から「Bourgeois」の諸訳語を全般的に受け入れていたが、訳語の消長に伴って、日本語訳本由来の訳語が次第に『共産党宣言』の中国語訳諸本から退出し、新訳語の「資産者」のみが定着している。

キーワード：共産党宣言, Bourgeois, 訳語創出, 中日交渉, 変貌と定着

はじめに

近代中日間の言語交渉は両言語の新語の生成に大きな役割を果たしており、『共産党宣言』の中国語訳は最初日本語訳を媒介にしたもので、社会主義関連の用語もそこから受けた影響は少なくなかった。本稿は「Bourgeois」の訳語を中心に、中日両国の『共産党宣言』の諸訳本での使用実態を調査する。本論文を通して、社会主義関連の概念である「Bourgeois」がいかに中日両言語に翻訳されていたかを検討し、言語交渉に伴って両国語の訳語の成立、およびその使用、変容と定着のプロセスを探らうとする。

一、近代日中両国における『共産党宣言』の翻訳

1. 近代日本における『共産党宣言』の翻訳

日本における社会主義の伝播は19世紀80年代初頭を発端としており、小崎弘道著「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」（1881）、ウールセイ（W. T. Dwigth）著、宍戸義知訳『古今社会党沿革説』（1882）、中江兆民著「近世社会党ノ沿革」（1882）等の文献を以て、社会主義に関する啓蒙的な知識が紹介され始めた¹。

19世紀90年代初頭から20世紀の初めにかけて、マルクスの著作物を対象とした研究が行われ始め、深井英五著『現時之社会主義』（1893）、田島錦治著『日本現時之社会問題』（1897）、福井準造著『近世社会主義』（1899）、幸徳秋水著『社会主義神髓』（1903）等の著書により『共産党宣言』における主な内容が紹介され、一部の段落も翻訳されている。1904年11月13日発行の『平民新聞』

¹ 宮島達夫「『共産党宣言』の訳語」（『言語の研究』、pp. 425-516、むぎ書房、1979）；胡為雄「馬克思主義伝入日本再転伝中国過程中的日本学者」（『中共中央党校学报』2014年第4期）参照。

第53号において掲載された『共産党宣言』は日本最初の全訳本であるが、堺利彦、幸徳秋水よりの共同訳である。同訳本には『共産党宣言』第三章の訳文が欠けているため、1906年3月創刊の『社会主義研究』第1号にて第3章の内容の訳文を追加した完訳本が掲載されていた。1906年の完訳本は堺利彦独自の作業であるが、基本的には1904年の全訳本を基に完成したものであるため、「堺利彦・幸徳秋水共訳」と記されている。

日本における『共産党宣言』の翻訳は1910年以降、政府の社会主義関連出版物への取締により一時的低迷に陥ったが、ロシアの十月革命の影響により、1917年以降は再び盛んに行われるようになった。河上肇は個人雑誌『社会問題研究』第1-3冊(1919)にて、「マルクスの社会主義の理論的体系」を掲載し、中に『共産党宣言』の部分訳があり、榎田民蔵は、『経済学研究』第1巻第1号(1919)にて、「社会主義及び共産主義文書」を掲載し、これは『共産党宣言』第三章より翻訳したものである²。日本語全訳本に関しては、同時期から1945年の終戦直後に至るまで、内務省警保局訳本(1919、1925)、堺利彦改訳本(1921)、早川二郎・大田黒年男共訳本(1930)、長谷川早太訳本(1930)、志保田博彦(塩田荘兵衛)訳本(1946)、社会科学研究会訳本(1946)等がある。そのうち、内務省警保局の二種の訳本及び堺利彦の改訳本に関しては、翻訳された当時の日本では依然と思想、言論弾圧の状況下であるため、非公開あるいは秘密出版の形での刊行に留まっている³。

2. 近代中国における『共産党宣言』の翻訳

中国で初めてマルクス主義について紹介されたのは19世紀90年代の末頃である。1898年、上海広学会より出版された『泰西民法志』はマルクスの生い立ちについて紹介された最初の中国語出版物であり、著者は来華宣教師のティモシー・リチャード(T. Richard)、訳者は胡貽谷である。また、翌年の『万国公報』第121巻にて、同じくティモシー・リチャード著、蔡尔康編纂の「今世景象」が掲載された。その中に、『共産党宣言』第一章の一段落の訳文が引用されており、『共産党宣言』について最初に触れられた中国語文献とみられる⁴。

20世紀初頭から1919年の五四運動前後に至るまで、中国は日本を媒介に社会主義関連の著作が刊行され、同時期の関連文献として君武(馬君武)著「社会主義与進化論比較」(1903)、趙

² 玉岡敦「日本語版『共産党宣言』における翻訳術語の変遷」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』(53)、八朔社、2012)参照。

³ 堺利彦改訳本(1921)は堺利彦が『社会主義研究』にて掲載の幸徳秋水との共訳本(1906)を基に、ドイツ語版原本を依拠した上で口語文に改めた訳本であり、堺利彦独自によって翻訳されたものであるが、訳者に関しては「幸徳秋水・堺利彦共訳」と記されている。玉岡敦「『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水・堺利彦(1904、1906)の位置」(『大原社会問題研究所雑誌』(603)、特集大原社会問題研究所所蔵 幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』の意義、2009)参照。

⁴ マルクス主義が中国での早期伝播に関する研究は李百玲「從翻譯看馬克思主義在中国的早期伝播」(『上海翻訳』2009年第1期)、陳家新「『共産党宣言』在中国的翻譯和版本研究」(『近現代史与文物研究』2012年第8期)などが挙げられる。

必振訳『近世社会主義』（1903）、朱執信著「徳意志革命家小伝」（1905）、宋教仁訳「万国社会党大会史略」（1906）、葉夏生著「無政府党与革命党之説」（1906）等が挙げられ、これらの出版物に『共産党宣言』の部分的な内容の翻訳が行われている。1908年には民鳴訳「紳士与平民」が活字され、当文は『共産党宣言』第一章の訳文に値しており、堺利彦・幸徳秋水共訳本（1906）を底本として翻訳されたものである。

五四運動が勃興した1919年以降はロシア語やドイツ語を媒介とした翻訳が徐々盛んになってきているが、日本語を媒介とした翻訳は依然と行われている。同時期の社会主義先駆者である李大釗、淵泉らは日本語を媒介に『共産党宣言』の部分訳を行ってきており、陳望道は堺利彦・幸徳秋水共訳の『共産党宣言』（1906）を底本にして、中国最初の全訳本を完成した。陳望道訳本（1920）の出版から1949年の中華人民共和国成立直前に至るまで、華崗訳本（1930）、成倣吾・徐氷共訳本（1938）、博古訳本（1943）、陳瘦石訳本（1943）、喬冠華訳本（1947）、100周年記念版訳本（1949）の合計7種類の中国語全訳本が刊行された⁵。

二、日本の諸訳本における「Bourgeois」の訳語の生成及び変遷

1. 早期の社会主義文献における「Bourgeois」の訳語

「Bourgeois」という概念が日本に伝えられたのは凡そ明治中期のことである。例えば、幕末・明治初期の英和辞書である『英和对訳袖珍辞書』（1862）と『附音挿図英和字彙』（1873）にはいづれも「Bourgeois」という見出し語が見られなかった。『明治英和字典』（1884）には初めて収録されていたが、活字の一種を表す「号活字」のほか、「社会ノ中流ニ立ツ人、中等社会ノ人」と記述されており、現代日本語の「中産階級」にあたるものの、語ではなく句の形で記述されていた。『明治英和字典』以後、もし「活字ノ一種」という意味を無視すれば、表1の示されたように、「Bourgeois」はしばらく他の英和辞書から消えてしまった。

表1 幕末・明治初期の英和辞書における「Bourgeois」の収録状況

辞書名	著者／編者	Bourgeois
英和对訳袖珍辞書（1862）	堀達之助	未収録
和英語林集成（1867）	ヘボン（J. C. Hepburn）	未収録
英和对訳袖珍辞書（1869）	蔵田屋清右衛門	未収録
英華字彙（1869）	柳沢信大訓点	未収録
附音挿図英和字彙（1873）	柴田昌吉	未収録

⁵ 華崗訳本（1930）と陳瘦石訳本（1943）は英語版訳本を、成倣吾・徐氷訳本（1938）と100周年記念版訳本（1949）はドイツ語版原本を、博古訳本はロシア語版訳本を底本として翻訳されたものである。また、喬冠華訳本（1947）は英語版訳本を参考に成倣吾・徐氷訳本（1938）を校正したものである。

明治英和字典 (1884)	尺振八訳	号活字；社会ノ中流ニ立ツ人、中等社会ノ人(名)
英和对訳辞典 (1885)	ノア・ウェブストル(Noah Webster) 原著、早見純一訳述	活字ノ一種 (n)
英和双解字典 (1885)	ピー・エー・ナットル(P. A. Nuttall) 原著、棚橋一郎訳	未収録
和訳字彙ウェブスター氏新刊大辞書 (1888)	イーストレーキー (Frank Warrington Eastlake), 棚橋一郎共訳	未収録
附音挿図和訳英字彙 (1888)	島田豊纂訳	未収録

一方、19世紀80年代に入って、社会主義思想の日本伝入に伴って、「Bourgeois」の諸訳語が早期の社会主義関係の出版物に現われはじめた。まず小崎弘道の「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」(1881)で「Bourgeois」の概念を表す訳語として「資本主」が見られる。

(1) 所有権ノ法ハ窃盗ノ方法ニシテ資本主ハ不当ノ利益ヲ占メ力役者ハ相当ノ報酬ヲ得ズ之ヲ救フ(中略)。「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」(『六合雑誌』1881年第1巻第7号)

それとほぼ同じ頃、宍戸義知訳『古今社会党沿革説』(1882)では「Bourgeois」の概念を表すのに、「財本主」が使用されていた。

(2) 此公会ニ於テ開読セル報告ハ趣味アル者ニシテ其万国聯合ト財本主ノ間ニ起ル確執ノ状景ヲ示明シテ……。「古今社会党沿革説」(弘令社出版局、1882)

19世紀の90年代になると、「資本家」という訳語も深井英五の『現時之社会主義』(1893)で用いられてきている。

(3) 資本家が最も好く資本を利用する間、換言すれば、最も少しの費用を以て最も多くの生産をなし、而して彼等自身と労働者との間に於ける利益の分配を公正にする間は、社会は其資本を彼等の手に委して可也。『現時之社会主義』(民友社、1893)

また、「資本主」と「資本家」が一時期に同じ文献にも併用されていることがあった。例えば、田島錦治の『日本現時之社会問題』(1897)、福井準造の『近世社会主義』(1899)等には、いずれも「資本主」、「資本家」が併用されている。

(4) 若し此等の物品にして資本主の所有たれば、彼等は之を覆修補理するが為めに、更に若干の利益分配を要求するを得べし。『近世社会主義』(有斐館、1899)

(5) 資本家が自己の利益と称して分取する所のものは、マルクスの所謂剰余価格にして、彼が即ち労働者の労働を没収せりとするもの是なり。『近世社会主義』(有斐館、1899)

明治中後期の日本で刊行された社会主義関連の出版物を調査したところ、「Bourgeois」の概念を表すために、下記の訳語が使用されていた。

表2 明治中後期の出版物における「Bourgeois」の訳語

文献名	著者／訳者	「Bourgeois」の訳語
-----	-------	----------------

近世社会党ノ原因ヲ論ズ（1881）	小崎弘道	資本主
古今社会党沿革説（1882）	宍戸義知	財本主
現時之社会主義（1893）	深井英五	資本家
日本現時之社会問題（1897）	田島錦治	資本主/資本家
近世社会主義（1899）	福井準造	資本主/資本家
社会主義（1899）	村井知至	資本家
近世社会主義評論（1900）	久松義典	資本家
社会主義概評（1901）	島田三郎	資本家
我社会主義（1903）	片山潜	資本家
社会主義神髓（1903）	幸徳秋水	資本主

表2で示されたように、「Bourgeois」は19世紀80年代の初頭、社会主義思想の伝来に伴って日本に入った社会主義関連の概念で、日本の学者たちはそれをそれぞれ「資本主」「財本主」「資本家」と訳していた。「資本主」「財本主」に較べて、「資本家」の使用が明治後期に多くなっている。

訳語として普及しつつある「資本家」は「資本」を語基とする複合名詞であり、語基である「資本」は古典漢籍を由来としており、元金の意味を表す漢語として明の白話小説に用例が見られ、英華辞書においてはドーリトル（J. Doolittle）編『英華萃林韻府』（1872）を以て「Capital」の訳語として記述されはじめています。

(6) 三年前帶了些資本，往京貿易，頗得些利息。 明『初刻拍案驚奇』（卷三）

表3 英華辞書における「Capital」の対訳語

辞書名	著者／編者	Capital
華英・英華字典（1815-1823）	モリソン（R. Morrison）	本錢
英華韻府歴階（1844）	ウィリアムズ（S. W. Williams）	本錢
英華字典（1847-1848）	メドハースト（W. H. Medhurst）	本錢
英華字典（1866-1869）	ロブシャイド（W. Lobsheid）	本錢
英華萃林韻府（1872）	ドーリトル（J. Doolittle）	本錢、資本

日本語における「資本」の初期用例は18世紀半ばないし江戸時代中期に遡り、元金、資金の意味で使用されてきており、英和辞書における訳語として記述されたのは19世紀80年代半ば刊行の尺振八訳『明治英和字典』（1884）が初であり、いずれも中国語側より遅れている。

(7) この銀子権に送りて資本となす。 『通俗赤繩奇縁』三・五回（1761）

表4 英和辞書における「Capital」の対訳語

辞書名	著者／編者	Capital
英和对訳袖珍辞書（1862）	堀達之助	元金

和英語林集成 (1867)	ヘボン (J. C. Hepburn)	SHIZAI
英華字彙 (1869)	柳沢信大訓点	本錢
英和对訳袖珍辞書 (1869)	蔵田屋清右衛門	冗金
附音挿図英和字彙 (1873)	柴田昌吉	財本
明治英和字典 (1884)	尺振八訳	資本、財本

一方、複合名詞の「資本家」に関しては、日本側の英和辞書においては19世紀80年代末頃刊行の島田豊編訳『附音挿図和訳英字彙』(1888)を以て「Capitalist」の訳語として記述されはじめているのに対し、19世紀に刊行された中国側の英華辞書において「資本家」が「Capitalist」、「Bourgeois」の訳語として記述されたケースはみられなかった。

表5 英和辞書における「Capitalist」の対訳語

辞書名	著者／編者	Capitalist
英和对訳袖珍辞書 (1862)	堀達之助	未収録
和英語林集成 (1867)	ヘボン (J. C. Hepburn)	KANE-MOCHI
英華字彙 (1869)	柳沢信大訓点	未収録
英和对訳袖珍辞書 (1869)	蔵田屋清右衛門	未収録
附音挿図英和字彙 (1873)	柴田昌吉	財主
明治英和字典 (1884)	尺振八訳	財主、銭主
英和对訳辞典 (1885)	ノア・ウェブストル (N. Webster) 原著、早見純一訳述	財主
英和双解字典 (1885)	ピー・エー・ナットル (P. A. Nuttall) 原著、棚橋一郎訳	未収録
和訳字彙ウェブスター氏新刊大辞書 (1888)	イーストレーキー (F. W. Eastlake), 棚橋一郎共訳	財主、資本主、株主
附音挿図和訳英字彙 (1888)	島田豊纂訳	財主、金主、資本家

表6 英華辞書における「Capitalist/Bourgeois」の対訳語

辞書名	著者／編者	Capitalist	Bourgeois
華英・英華字典 (1815-1823)	モリソン (R. Morrison)	未収録	未収録
英華韻府歴階 (1844)	ウィリアムズ (S. W. Williams)	未収録	未収録
英華字典 (1847-1848)	メドハースト (W. H. Medhurst)	未収録	小錫字
英華字典 (1866-1869)	ロブシャイド (W. Lobsheid)	財東、本銭主	未収録
英華萃林韻府 (1872)	ドーリトル (J. Doolittle)	未収録	未収録
中英袖珍字典 (1874)	ステント (G. C. Stent)	未収録	未収録

増訂英華字彙（1884）	井上哲次郎編訳	財東、財主、本 錢主	小錫字
華英字典集成（1899）	鄭其照	財東、財主	未収録

表5と表6にある「Capitalist」の諸対訳語の対照によれば、英和辞書における「資本家」は英華辞書による影響はみられないものの、当漢語は日本側の学者の手により、中国由来の「資本」を語基に創造された訳語とみられる。

一方、「Bourgeois」の場合は、もし「小錫字」（活字ノ一種）という意味を無視すれば、英華辞書類には収録されておらず、英和辞書類には『明治英和字典』（1884）のみに収録されている。しかし、『明治英和字典』における「Bourgeois」は語ではなく、「社会ノ中流二立ツ人、中等社会ノ人」という句の形で記述されている。意味から見れば、「資本」を所有し、人を雇用する「Capitalist」には「Bourgeois」の表す「社会において一定の地位を有する人」というニュアンスが含まれており、「Bourgeois」はこの点で「Capitalist」とある程度意味が重なっているため、「Capitalist」の訳語である「資本家」が「Bourgeois」に転用されたと考えられる。

2. 堺利彦・幸徳秋水全訳本における「Bourgeois」の訳語

日本最初の『共産党宣言』全訳本は堺利彦・幸徳秋水の1904年全訳本である。また、1906年3月創刊の『社会主義研究』第1号にて、堺利彦より1904年の全訳本を基に第三章の内容の訳文を追加し、日本最初の完訳本として掲載された。この1904年の全訳本にも、1906年の完訳本にも、「Bourgeois」という概念を翻訳する際、当時すでにあつた「資本家」と「資本主」という訳語をつかわず、「紳士」を使っており、更に「紳士」を語基に「Bourgeoisie」の対訳語として「紳士閣」も創出していた。具体例として以下のものが挙げられる。

(8) 然れども此階級的争闘が極めて単純なるに至れるは、現時代即ち紳士閣の時代有する特徴なりとす、然り今の社会は全体に於て、刻一刻に割烈して、兩個の相敵視する大陣營、直接に相對立する二大階級を現じつつあるなり、何の階級ぞや、曰く紳士、曰く平民。

「共産党宣言」（『平民新聞』1904年第53号）

(9) 又紳士間の競争漸く起り、従つて商業上の恐慌起るに連れ、労働者の賃金は更に動揺するに至る。

「共産党宣言」（『社会主義研究』1906年第1号）

(10) 共産主義の特徴は、一般財産の禁止にあらず、唯だ紳士の財産の禁止のみ。

「共産党宣言」（『社会主義研究』1906年第1号）

この「Bourgeois」の訳語である「紳士」は、中国古典の「縉紳之士」から省略したものである。「縉紳/搢紳」は中国古典で官吏という身分を表し、「縉紳之士」はある程度の官職を有する人物という意味を表した。例えば、

(11) 故搢紳者不憚為詐帯剣者。

後漢『漢書』（卷六十四下）

(12) 今天下縷縷縉紳之士所以仰瞻明公者以輔相漢室举直措枉致之雍熙也。

晋『後漢紀』(後漢考献皇帝紀)

元代以降、「縉紳之士」の略語に値する「紳士」の用例が確認され、身分の高い人物、或いはある程度の官職を有する人物の意味を表す用例として以下のものが挙げられる。

(13) 此吾客呂公仲氏家親識呂公之為人高居潔己行無暇 不与惡人交 不与紳士游侍其坐
然明月之照席也 可謂善清也。 元『東維子文集』(卷之十七)

「縉紳/搢紳」が日本語における初用例は8世紀の奈良時代に遡り、身分の高い人物、官職を有する人物という意味で使用されている。中国古典から伝来したものとみられるが、伝来当初から長々と受け継がれてきていた。例えば、

(14) 聖衿属喧節、置酒引搢紳。 平安時代『懷風藻』

(15) 旅食于京華者三十年、而遊於貴介縉紳ノ間、專以連歌為家学。室町時代『翰林胡蘆集』
堺利彦・幸徳秋水の訳本に使われた「紳士」は漢籍から語形を借りて、それに「Bourgeois」という意味を新たに与えたものと思われるが、その生成を探れば、近代中国の英華辞書と深いつながりがあり、「Gentleman」の中国語訳から転用されたものと考えられる。近代中国の英華辞書では「Bourgeois」と「Gentleman」はいかに翻訳されていたかを整理すると表7の通りである。

表7 英華辞書における「Bourgeois」と「Gentleman」の対訳語

辞書名	著者／編者	項目	記述
華英・英華字典 (1815-1823)	モリソン (R. Morrison)	Gentleman	一位體面的人
		Bourgeois	未収録
英華韻府歴階 (1844)	ウィリアムズ (S. W. Williams)	Gentleman	未収録
		Bourgeois	未収録
英華字典 (1847-1848)	メドハースト (W. H. Medhurst)	Gentleman	一位老爺、一位世家人、郷紳、 縉紳先生、郷子、宦官、郷宦
		Bourgeois	未収録
英華字典 (1866-1869)	ロブシャイド (W. Lobscheid)	Gentleman	先生、老師、相公、老爺、紳士、 郷宦、縉紳先生
		Bourgeois	小錫字

表7の示されたように、諸英華辞書では見出し語としての「Bourgeois」はほとんど未収録状態であったが、「Gentleman」は、「縉紳先生」または、「紳士」と訳されたケースが見られる。

近代中国の英華辞書は明治中期までの英和辞書に与えた影響が大きいと言われている。この時期の英和辞書を調べたところ、表8の示されたように『英和对訳袖珍辞書』(1862)等の19世紀60年代刊行の辞書を除けば、いずれも「Gentleman」は「縉紳」または、「紳士」と訳されていた。

表8 英和辞書における「Gentleman」の対訳語

辞書名	著者／編者	Gentleman
英和对訳袖珍辞書(1862)	堀達之助	歴々ノ人、重々シキ人、君(男ノ尊称)
和英語林集成(1867)	ヘボン(J. C. Hepburn)	KUNSHI
英和对訳袖珍辞書(1869)	蔵田屋清右衛門	歴々シ人、重々シキ人、君(男ノ尊称)
英華字彙(1869)	柳沢信大訓点	相公、小爺(Young)、老爺(Old)、列位、列公(Men)
附音挿図英和字彙(1873)	柴田昌吉	縉紳(平民以上ノ人ヲ云)、相公、大人、先生
明治英和字典(1884)	尺振八訳	紳士、郷紳、君子、先生、人民(名)
英和对訳辞典(1885)	ノア・ウェブストル(N. Webster) 原著、早見純一訳述	縉紳、先生
英和双解字典(1885)	ピー・エー・ナットル(P. A. Nuttall) 原著、棚橋一郎訳	君子、縉紳、相公、大人、先生
和訳字彙ウェブスター氏新刊大辞書(1888)	イーストレーキー(F. W. Eastlake), 棚橋一郎共訳	縉紳(平民以上ノ人ヲ云)、相公、大人、先生、君子、武士
附音挿図和訳英字彙(1888)	島田豊纂訳	紳士、君子、先生、大人、兵器ヲ携フル人、武士(n)

表7と表8にある「Gentleman」の諸対訳語の対照を以て、和訳は近代中国の英華辞書から受けた影響はかなり大きいと感じられる。

一方、「Bourgeois」の場合は先述の如き、英華辞書類になく、英和辞典類には『明治英和字典』(1884)のみに収録されており、「社会ノ中流ニ立ツ人、中等社会ノ人」という句の形で記述されており、「Gentleman」の意味に近い「社会において一定の地位を有する人」というニュアンスが窺えられる。「Bourgeois」はこの点で「Gentleman」とある程度意味が重なっているので、「Gentleman」の訳語である「縉紳」と「紳士」が「Bourgeois」に転用されたと考えられる。しかし、「Bourgeois」という語には、中産階級の市民という意味のほか、また、マルクス主義学説としての生産資料を占有し、労働者を搾取する資本家という意味もある。堺利彦・幸徳秋水の『共産党宣言』全訳本、完訳本では、当時すでにあつた「資本家」などの対訳語が使われず、あえて「紳士」が「Bourgeois」の対訳語として使われていた。その理由を探れば、労働者運動が盛んになったこの時期、階級対立のにおいが強い「資本家」という語を避けようとするのではないかと察している。

3. 日本語訳諸本における「Bourgeois」の訳語の変遷

堺利彦・幸徳秋水の諸訳本では、「Bourgeois」という概念に当たる言葉として、「紳士」を使っていたが、しかし、この語は後の社会主義関連の出版物にも、『共産党宣言』の他の諸訳本にも意外に使われていなかった。

堺利彦・幸徳秋水の全訳本（1904）、完訳本（1906）に継ぎ、日本で刊行された『共産党宣言』の訳本はほかに内務省警保局訳本（1919、1925）、長谷川早太訳本（1930）、社会科学研究会訳本（1946）などがある。堺利彦・幸徳秋水の共訳本以降の日本語訳諸本に、「Bourgeois」の訳語はきわめてバリエーションに富んでいる。例えば、

(16) 十数年このかた工業及び商業の歴史は、只現代の生産力が現代の生産関係に対し、有産者の生活条件及び其支配力に他ならざる所の所有関係に対し、謀叛を試みつつあるの歴史である。 河上肇「マルクスの社会主義の理論的体系（『共産党宣言』部分訳）」（『社会問題研究』1919年第1冊）

(17) 立憲国家に対し、資本家的競争、資本家的出版の自由、資本家的法律、資本家的自由及び平等に対して、伝統的呪咀を抛けつけるべき。 榎田民蔵「社会主義及び共産主義文書（『共産党宣言』第三章訳）」（『経済学研究』1919年第1巻第1号）

(18) 社会は一全体として漸次二ヶの大なる敵対陣にぶんりつつあり、直接相互対向する二大階級に分立しつつあり。二大階級とは資産階級と無資産階級これなり。

内務省警保局訳『共産党宣言』（1919）

(19) 全社会は次第々々に相敵視する二大陣営、直接相互に対する二大階級に分裂しつつある。すなわち、ブルジョアとプロレタリアである。 堺利彦改訳『共産党宣言』（1921）

諸訳本における「Bourgeois」の対訳語を整理すると表9の通りである。

表9 日本語訳諸本における「Bourgeois」の対訳語

訳本	刊行時期	「Bourgeois」の対訳語
堺利彦・幸徳秋水全訳本	1904	紳士
堺利彦・幸徳秋水完訳本	1906	紳士
河上肇部分訳本	1919	資本家、有産者
榎田民蔵部分訳本	1919	資本家
内務省警保局訳本（1919年版）	1919	資産階級
堺利彦改訳本 ⁶	1921	ブルジョア
内務省警保局訳本（1925年版）	1925	ブルジョア

⁶ 堺利彦改訳本（1921）の刊行は地下・秘密出版の形に留まっているため、原版の入手は困難であるものの、玉岡敦（2011）の研究によれば、当訳本は1945年終戦直後に彰考書院においてほぼそのまま公刊されていることが明らかとなった。従って、本研究では、堺改訳本（1921）の用例に関しては、1945年公刊の彰考書院版訳本を参考した。

早川二郎・大田黒年男共訳本	1930	ブルジョア
長谷川早太訳本	1930	有産者
志保田博彦（塩田莊兵衛）訳本 ⁷	1946	ブルジョア
社会科学研究会訳本	1946	ブルジョア/ブルジョアジー

表 9 で示されている通り、堺利彦・幸徳秋水共訳本以降の日本語訳諸本では、「Bourgeois」の訳語にそれぞれ「資本家」「有産者」「資産階級」「ブルジョア」が使用されていたが、「紳士」は上掲の諸訳本ではいずれも使われていなかった。「資本家」の初出は前述のように、深井英五の『現時之社会主義』（1893）に遡れるが、「有産者」に関しては、1915年1月20日発行の『朝日新聞』（朝刊）に掲載された「英国から（二）」が最初である。

また、「資産階級」の初用例は、内務省警保局訳本に先駆けて、20世紀の初頭に次のものが挙げられる。

(20) 極言すれば是れ単に資産階級をして特権を私せしめるものに非ずやと云ふにあり。

「伊国に於ける一年志願兵廃止問題」（『読売新聞』（朝刊）1913年11月29日）

しかし、この語は内務省警保局訳本（1919）に使用されるに至るまで、社会主義関連の出版物において「Bourgeois」の訳語として用いられたケースはあまりみられなかった。

内務省警保局訳本（1919）まで、諸訳本における「Bourgeois」の対訳語はいずれも漢語を用いられていたが、それ以後は漢語対訳語からカタカナ語の「ブルジョア」へ傾けるようになっていく。

三、中国の諸訳本における「Bourgeois」の訳語の生成及び変遷

1. 中国の早期社会主義文献における「Bourgeois」の訳語

中国における社会主義の伝播ないし『共産党宣言』の翻訳は来華の西洋宣教師によって幕が開けられた。19世紀の末頃、宣教師のティモシー・リチャード（T. Richard）より著した社会主義関連の出版物には、『共産党宣言』の段落訳が現れ、「Bourgeois」という概念を「富家」、「糾股辦事之人」などの言葉で充当されていた。

(21) 豪富之家，安坐而享其成，特所謂分利之人耳。分利之人日益富，生利之人日益貧。事之不平，孰甚于此？且富家更施一网打尽之計。一事也，獨立不能勝，則合什百千万之衆，尽力以霸占之。
ティモシー・リチャード「今世景象」（『万国公報』1899年第121期）

(22) 馬克思之言曰：“糾股辦事之人，其權籠罩五洲，突過于君相之範圍一國，吾儕若不早為之所，任其蔓延日広，誠恐遍地球之財幣，必將尽入其手。然万一到此時勢，当即系富家權尽之時……”
ティモシー・リチャード「今世景象」（『万国公報』1899年第121期）

⁷ 本研究において、志保田博彦（塩田莊兵衛）訳本（1946）の用例に関しては1948年出版の再版を参考した。

20世紀の初頭から五四運動の前後にかけて、中国では日本語出版物を媒介とした社会主義文献の翻訳が盛んに行われている。中国人の手による社会主義関連の翻訳は「近世政治史」(1901)からである。この本は有賀長雄著『近世政治史』を原本にして翻訳されたもので、書中「Bourgeois」という概念を表すのに、原本から「資本家」という訳語が借用されていた。「資本家」はほかに羅大維訳『社会主義』(1902)、趙必振訳『近世社会主義』(1903)、朱執信著「德意志革命家小伝」(1905)等の後出の出版物においても踏襲されてきている。

(23) 要之、徳法戦争以前、不過議定其主義綱領、尚未見諸実行、但政府恐外国工人為其後援、事更難措、故威逼資本家殉同盟罷工之請、実則並無援助工人之心、而未嘗為之定工価。

「近世政治史」(『訳書彙編』1901年第2期)

(24) 我党信否？労働者欲脱資本家之羈絆、斯労働者不可不自戦。而欲労働者之自戦者、為使分資本家階級制度之特権、全廢滅……。

『社会主義』(上海広智書局、1902)

1919年の五四運動まで、中国で刊行された社会主義関連の出版物では、「Bourgeois」という概念を表すのに、「資本家」を用いるほか、「資本主」「富紳」「紳士」なども使用されていた。たとえば、宋教仁訳「万国社会党大会略史」(1906)は大杉栄の同名文章を底本にして訳されたものであり、原本で使用されている「紳士」に対し、宋教仁は「富紳」と改訳していた。

(25) 世界者、人類共有之世界也。現世界之人類、統計不下十五万万、然區別之、得形成為二大階級：掠奪階級与被掠奪階級是矣。換言之、即富紳(Bourgeois)与平民(Proletariat)之二種也。

「万国社会党大会略史」(『民報』1906年第5号)

民鳴訳「紳士与平民」(1908)は、『共産党宣言』第一章の訳文に値するものである。当訳文は堺利彦・幸徳秋水完訳本(1906)を底本に翻訳されたもので、文中の「Bourgeois」という概念を訳すのに、底本で使用されている「紳士」が直接借用されていた。

(26) 故今日社会全体之離析、日甚一日、双方対峙之形、以呈巨大之二階級、此階級惟何、一曰紳士、二曰平民。

「紳士与平民」(『天義報』1908年第15-17卷合併号)

この時期に出版された社会主義関連の文献を調査して、諸出版物に用いられた「Bourgeois」の訳語は表10の通りである。

表10 中国の早期社会主義文献における「Bourgeois」の訳出

文献名	原本著者名	著者／訳者	「Bourgeois」の訳語
近世政治史 (1901)	有賀長雄	訳者不明	資本家
社会主義 (1902)	村井知至	羅大維訳	資本家
社会主義与進化論比較-附 社会党巨子所著書記 (1903)	無	馬君武著	資本家
近世社会主義 (1903)	福井準造	趙必振訳	資本家/資本主
社会主義神髓 (1903)	幸徳秋水	中国達識訳社訳	資本家

徳意志革命家小伝（1905）	無	朱執信著	資本家
万国社会党大会略史（1906）	大杉栄	宋教仁訳	富紳
紳士与平民（1908）	堺利彦・幸徳秋水	民鳴訳	紳士
馬克思的唯物史観（1919）	河上肇	淵泉訳	資本家
我的馬克斯主義観（1919）	無	李大釗著	資本家

表10の示されたように、1919年の五四運動までの十数年間、社会主義関連の中国語出版物はほとんど日本語から翻訳されたもので、これらの出版物に用いられている「Bourgeois」の訳語も日本由来の「資本家」が優勢である。「資本家」は日本語からの借用語だと断言できるが、「富紳」も「紳士」も訳者自身の案出より、日本語原本からの影響が高いと考えられる。「富紳」と「紳士」が「Bourgeois」の訳語として中国語に広げることにはなかったものの、日本語の影響により、社会主義関連の出版物で一時期に「Bourgeois」の訳語として機能していたのが確かである。

2. 陳望道全訳本における「Bourgeois」の訳語

中国最初の『共産党宣言』全訳本は五四運動直後に刊行された陳望道訳本（1920）である。陳望道以前に、『共産党宣言』の段落の翻訳や部分的章節の翻訳はすでに行われていたが、陳望道は日本最初の完訳本である堺利彦・幸徳秋水の共訳本（1906）を底本に、中国語に全訳していた。『共産党宣言』に現われているマルクス主義の概念について、陳望道全訳本は堺利彦・幸徳秋水の完訳本から借りたものがきわめて多いが、「Bourgeois」の対訳語は例外である。

陳望道の全訳本を堺利彦・幸徳秋水の完訳本と対照して、「Bourgeois」の対訳語は次のように異なっている。

(27) 又間断なき機械の進歩は彼等の生活をして愈々益益不安ならしめ、次で個々の労働者と個々の紳士との間の衝突は、漸々二階級間の衝突たるの性質を帯びしむ。

堺利彦・幸徳秋水共訳「共産党宣言」（『社会主義研究』1906年第1号）

(28) 而且、機器不住的進歩、使他們的生活刻刻不安、労働者和資本家個人的衝突、又漸漸帶着兩階級間衝突的彩色。

陳望道訳『共産党宣言』（社会主義研究社、1920）

(29) 然れども、彼等は未だ嘗て、一刻たりとも、紳士と平民階級とが敵視争闘せるの事実を、最も明瞭に労働者に感知せしむることを忘れず。

堺利彦・幸徳秋水共訳「共産党宣言」（『社会主義研究』1906年第1号）

(30) 但一刻也不会忘記使労働階級明白感覺有產者和無產者敵意的抵抗。

陳望道訳『共産党宣言』（社会主義研究社、1920）

すなわち堺利彦・幸徳秋水の完訳本（1906）においては、「Bourgeois」という概念を「紳士」若しくは「紳士閥」と訳されていたが、それに対して、陳望道全訳本ではそれを使わず、「資本家」あるいは「有産者」に改訳されている。

この「資本家」も、「有産者」も前述したように日本由来の訳語であるが、陳望道訳本(1920)では原本の「紳士」を用いず、「資本家」と「有産者」を使用したのは次の原因が考えられる。「Bourgeois」はマルクス主義の概念として、「企業を営みし利潤追求のために労働者を使用する人」という意味を表している。しかし、「紳士」という語は本来「上流社会の男性」というニュアンスをもっていて、マルクス主義の思想を正確に表現できないのである。辛亥革命(1911)まで、中国社会の主な対立は民衆と専制王朝との対立であり、「富紳」、「紳士」という階級色彩の薄い対訳語を使用しても受け入れられるが、1919年の五四運動前後、労働者階級がすでに自分の権利を求めようになっている。こういう階級対立の激しい時代、「紳士」は「Bourgeois」の訳語として社会の要求に満足できず、マルクス主義の思想を的確に表現できる訳語が必要となっている。

「資本家」という訳語は前述したように、20世紀の初頭すでに日本語から中国語に入ってきた。陳望道全訳本が刊行された当初、中国の社会主義先駆者たちの著書、訳書には、「資本家」がすでに多く使われていた。例えば、李大釗著「我的馬克思主義觀」(1919)、淵泉訳「馬克思的唯物史觀」(1919)には「資本家」の使用例が多く見られる。

(31) 馬克思則以“物質的生產力”為最高動因：由家庭經濟變為資本家的經濟，由小產業制變為工場組織制，就是由生產力的變動而決定的。

「我的馬克思主義觀」(『新青年』1919年第6卷第5号)

(32) 好像用魔術喚起的這麼偉大的生產手段，就是資本家的生產關係和交通關係—資本家的所有關係—現代的資本家的社会(略) 「馬克思的唯物史觀」(『新青年』1919年第6卷第5号)

こういう流れの中、陳望道訳本(1920)では「Bourgeois」の概念を表すのに原本の「紳士」を使わず、『共産党宣言』の思想を的確に反映し、かつ当時の社会主義関係の出版物で多く使われていた「資本家」という語を選んだと思われる。

3. 中国語訳諸本における「Bourgeois」の訳語の変遷

中国の『共産党宣言』の翻訳は民鳴訳「紳士与平民」(1908)を皮切りにして、陳望道の全訳本(1920)から中華人民共和国成立直前の100周年記念版訳本(1949)まで、合計7種類の中国語全訳本が出版されている。この7種類の全訳本におけるマルクス主義概念の翻訳はバリエーションに富み、マルクス主義の用語が中国での翻訳、使用と定着の流れを客観的に反映しているが、「Bourgeois」の訳語も諸訳本では大きく変わっている。陳望道の全訳本(1920)以後、諸訳本では次の訳語が使われていた。

(33) 而且，機器不住的進步，使他們生活刻刻不安；労働者和資本家個人的衝突，又漸漸帶着兩個階級間的衝突的色彩。 華崗訳『宣言』(上海華興書局、1930)

(34) 越發迅速發展的機器的不斷改良，使得無產者的生活狀況越發越沒有保證；各個工人與各個有產者中間的衝突越發帶上兩個階級間的衝突底性質。

成做吾・徐氷訳『共産党宣言』(解放社、1938)

(35) 日益迅速發展的機器底不斷改進，使得無產者底生活狀況越發越沒有保證；個別工人与個別資產者中間的衝突越發日帶上兩個階級的衝突底性質。

博古訳『共産党宣言』（解放社、1943）

(36) 起初是個別的工人，爾後是某一个工廠中的工人，然後是某一个地方某一勞動部門中的工人，向着那直接剝削他們的單個資產者作鬭爭。

『共産党宣言（百周年紀念版）』（解放社、1949）

訳諸本に使用されている「Bourgeois」の対訳語をまとめると表 11 の通りである。

表 11 中国語諸訳本における「Bourgeois」の対訳語

訳本名	刊行時間	「Bourgeois」の対訳語
民鳴の第一章訳文	1908	紳士
陳望道訳本	1920	資本家/有産者
華崗訳本	1930	資本家/有産者
成傲吾・徐氷共訳本	1938	有産者
博古訳本	1943	資産者
陳瘦石訳本	1943	資産階級
喬冠華訳本	1947	有産者
100周年記念版訳本	1949	資産者

表 11 の示されたように、『共産党宣言』の中国語諸訳本においては、「Bourgeois」の対訳語として、日本由来の「資本家」「有産者」「資産階級」のほか、博古全訳本（1943）から「資産者」も新出していた。

「資産者」の「資産」は漢籍で財産の意味として用いられていたが、「資産者」という語は古典に出典がみられず、日本語での最初の使用例が 19 世紀 80 年代の『朝日新聞』に遡れる。

(37) 五万円以上資産者 東区百二名 西区四十五名 南区三十六名 北区二十名……

「五万円以上資産者 其他の調査」（『大阪朝日新聞』（朝刊）1886 年 4 月 8 日）

字面から見て、財産を持っている人の意味と察しているが、しかし、この語の使用例は非常に稀で、『共産党宣言』の諸訳本を含む日本の社会主義関連の出版物ではほとんど使用されておらず、各時期の国語辞書にも収められなかった。

一方、中国語における「資産者」の初期用例は 19 世紀 90 年代の『申報』に見られる。

(38) 乃統中國計之地至大人至衆而地之墾爲田者不過十之三人之不治資産者十之五……

「勸植養議」（『申報』1893 年 2 月 1 日）

この「資産者」はまだ語とは言えず、そのすぐ前の「不治」と一緒にフレーズを構成し、財産の治めない人という意味を表す。『申報』から博古訳『共産党宣言』（1943）までの長い間、「資産者」は語として中国の文献資料にほとんど使用されていなかった。

『共産党宣言』の中国語訳諸本において、初めて「資産者」を「Bourgeois」の訳語として充当されたのは博古訳本(1943)である。博古は中国共産党の早期指導者として、旧ソ連での留学経験がある。『共産党宣言』の博古訳本はロシア語の訳本を底本に訳されたもので、日本語の訳本による影響は薄いものとみられる。「Bourgeois」の対訳語である「資産者」は日本語との直接的なつながりがなく、博古より工夫して案出されたものと考えられる。

博古訳本以後、陳瘦石訳本(1943)、喬冠華訳本(1947)ではそれぞれ「資産階級」「有産者」という日本由来の訳語を使われていたが、しかし、博古の訳本は延安整風運動中の党幹部のマルクス主義必読書と指定され、その影響力はきわめて大きいものである。中華人民共和国成立直前の100周年記念版訳本では、「Bourgeois」の対訳語として、「資産者」が用いられていたが、現代中国の権威的な翻訳機関である中央編訳局が、2005年に翻訳出版した訳本にも「資産者」が使用されている。

(39) 機器的日益迅速的和継続不斷的改良，使工人的整個生活地位越来越沒有保障；單個工人和單個資産者之間的衝突越来越具有兩個階級的衝突的性質。

中央編訳局訳『共産党宣言』(中央編訳出版社、2005)

百年もの歳月を経て、「資産者」は「Bourgeois」の対訳語として、他の諸訳語に取って代わり、『共産党宣言』の中国語訳本に定着し、マルクス主義の概念を表す通用語として現代中国語に使われつつある。

終わりに

日本では社会主義学説および『共産党宣言』を翻訳する際、中国より先駆けて数多くの訳語を創出していたが、「Bourgeois」というマルクス主義の概念を表すのに、「紳士」「資本家」「有産者」「資産階級」「ブルジョア」等多くの訳語で充当されてきた。これらの訳語には、近代中国の英華辞書より転用されたものもあれば、日本人の思案した訳語もある。さらにカタカナの外来語もある。中国では社会主義学説との最初の触れ合いは来華の西洋宣教師を通じたものであるが、20世紀に入ると、日本の出版物を媒介にした受け入れが主な流れである。日本の社会主義学説の出版物、さらに『共産党宣言』の日本語訳諸本を通して、「紳士」「資本家」「有産者」「資産階級」などの訳語が中国語に入り、『共産党宣言』の中国語訳諸本で、「Bourgeois」の対訳語として使用されていた。しかし、訳語も術語も外国語から受容すると同時に、変容と新しいものの創出が絶え間なく続けていた。博古訳本の「資産者」の登場に伴って、他の諸訳語が次第に『共産党宣言』から退場し、あるいは他の分野に使われているが、「資産者」のみは後の中国語訳諸本に使われてきている。

・参考文献

・研究書・論文

日本語文献

大久保利謙、『西周全集・巻2』、宗高書房、1966年。

宮島達夫、「『共産党宣言』の訳語」、『言語の研究』、むぎ書房、1979年425-516頁。

- 松田隆行、「福井準造の思想的原点：日清戦後の「知識人」とナショナリズム・社会主義・農業」、『近代日本研究』第14期、1997年1-30頁。
- 陳力衛著、賀婷・笹野ゆり訳、「『共産党宣言』の翻訳の問題-版本の変遷から訳語の先鋭化について」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49期、2008年9-26頁。
- 玉岡敦、「『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水・堺利彦(1904、1906)の位置」、『大原社会問題研究所雑誌(特集 大原社会問題研究所所蔵 幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』の意義)』第603期、2009年14-26頁。
- 玉岡敦、「日本語版『共産党宣言』における翻訳術語の変遷」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第53期、2012年11-23頁。
- 中国語文献
- 高放、「『共産党宣言』在中国的傳播」、『學習与探索』第1期、1983年44-54頁。
- 姜義華、『社会主義学説在中国的初期傳播』、復旦大学出版社、1984年。
- 李博(W. Lippert)著、趙倩訳、『漢語中的馬克思主義術語的起源与作用』、中国社会科学出版社、2003年。
- 朱京偉、「馬克思主義文献の早期日訳及其訳詞」、『語義的文化変遷』、武漢大学出版社、2007年384-412頁。
- 顧錦屏、「閃耀着馬克思主義真理之光的不朽著作 — 紀念『共産党宣言』發表160周年」、『国外理論動態』第4期、2008年7-12頁。
- 李百玲、「從翻譯看馬克思主義在中国的早期傳播」、『上海翻譯』第1期、2009年67-69頁。
- 玉岡敦、「『共産党宣言』邦訳史」、『經濟学史学会第75回全国大会』(口頭発表論文)、2011年142-147頁。
- 陳家新、「『共産党宣言』在中国的翻譯和版本研究」、『近现代史与文物研究』第8期、2012年116-133頁。
- 胡為雄、「馬克思主義伝入日本再転伝中国過程中的的日本学者」、『中共中央党校学报』第4期、2014年103-106頁。
- 鮮明、「『近世社会主義』对馬克思主義学説訳介的貢獻」、『社会科学論壇』第4期、2015年220-225頁。
- ・研究資料
- 日本語資料
- 小崎弘道、「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」、『六合雑誌』第1巻第7号、1881年105-115頁。
- ウールセイ(Woolsey Theodore Dwight)著、宍戸義知識、『古今社会党沿革説』、弘令社出版局、1892年。
- 深井英五、『現時之社会主義』、平民社、1893年。
- 田島錦治、『日本現時之社会問題』、東華堂、1897年。
- 福井準造、『近世社会主義』、有斐館、1899年。
- 村井知至、『社会主義』、労働新聞社、1899年。
- 久松義典、『近世社会主義評論』、文学同志会、1900年。
- 島田三郎、『社会主義概評』、警醒社、1901年。
- 片山潜、『我社会主義』(1903)、『片山潜/田添鉄二集』、青木書店、1955年19-126頁。
- 幸徳秋水、『社会主義神髓』、朝報社、1903年。
- 堺利彦・幸徳秋水共訳、「共産党宣言」、『大阪平民新聞』第53号、1904年1-9頁。
- 堺利彦・幸徳秋水共訳、「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号、1906年1-35頁。
- 大杉栄、「万国社会党大会略史」、『社会主義研究』第1号、1906年60-75頁。

- 河上肇、「マルクスの社会主義の理論的体系(二)」、『社会問題研究』第二冊、1919年22-35頁。
櫛田民蔵、「社会主義及び共産主義文書」、『経済学研究』第1巻第1号、1920年214-225頁。
内務省警保局訳、『共産党宣言』、内務省警保局、1925年。
内務省警保局訳、『共産党宣言』、内務省警保局、1925年。
早川二郎・大田黒年男共訳、『共産党宣言』、マルクス主義の旗の下に社、1930年。
長谷川早太訳、『共産党宣言』、労農書房、1930年。
堺利彦・幸徳秋水共訳、『共産党宣言』、彰考書院、1945年。
社会科学研究会訳、『共産党宣言』、社会科学研究会、1946年。
志保田博彦(塩田莊兵衛)訳、『共産党宣言』(1948年版再版)、新社会社、1948年。
中国語資料
ティモシー・リチャード(Timothy Richard)訳、「今世景象」、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年21-39頁。
「近世政治史」(訳者不明、1901)、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年40-44頁。
羅大維訳、「社会主義」(1902)、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年45-83頁。
馬君武、「社会主義与進化論比較-附社会党巨子所著書記」(1903)、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年105-116頁。
趙必振訳、『近世社会主義』、上海広智書局、1903年。
中国達識訳社訳、『社会主義神髓』(1903)、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年147-182頁。
宋教仁訳、「万国社会党大会略史」(1906)、『五四運動前馬克思主義在中国的介紹和伝播』、湖南人民出版社、1986年243-261頁。
民鳴訳、「紳士与平民」、『天義報』第15-17期合併号、1908年1-19頁。
淵泉、「馬克思的唯物史観」(1919)、『新青年(簡体典蔵全本)・第六卷』、寧夏人民出版社、2011年443-450頁。
李大釗、「我的馬克斯主義観(上)」(1919)、『新青年(簡体典蔵全本)・第六卷』、寧夏人民出版社、2011年455-471頁。
李大釗、「我的馬克斯主義観(下)」(1919)、『新青年(簡体典蔵全本)・第六卷』、寧夏人民出版社、2011年549-560頁。
陳望道訳、『共産党宣言』、社会主義研究社、1920年。
華崗訳、『宣言』、華興書局、1930年。
成做吾・徐氷訳、『共産党宣言』、解放社、1938年。
博古訳、『共産党宣言』、解放社、1943年。
陳瘦石訳、「共産党宣言」(1943)、『比較經濟制度』、商務印書卷、1943年。
喬冠華訳、『共産党宣言』、中国出版社、1947年。
『共産党宣言(100周年記念版)』、解放社、1949年。
馬克思・恩格斯著、中央編訳局訳、『共産党宣言』、中央編訳出版社、2005年。